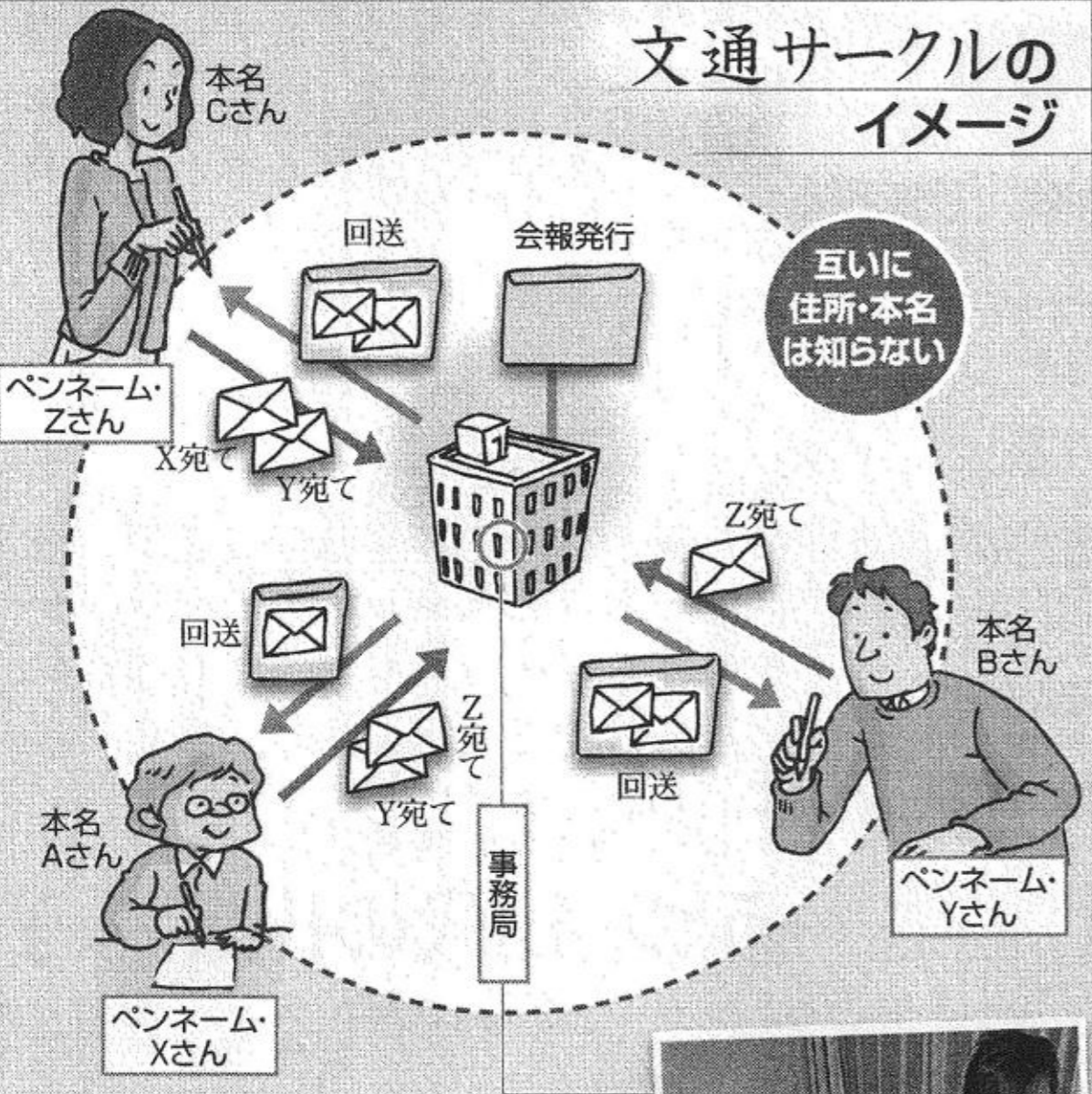


インターネットの交流サイト(SNS)やツイッタが全盛のいま、ネットを入り口にして文通に回帰する若者が増えています。IT世代の彼らが、なぜ?

「お江戸通り13番地・あさひ」より「ハマっ子通り〇番地・〇〇」さんへ。 「茶畑通り6番地・杉」より「古都みやび通り〇番地・〇〇」さんへ。 「文通村」では、こんな便りが月に約500通り行き交う。 村は、本名や具体的な住所を明かさずに、手紙がやりとりできる会費制のコミュニティだ。 会員は、事務局が発行する会報の会員紹介欄から文通相手を選び、事務局に手

文通サークルのイメージ



手書き回帰 心休まる

は、東京都内で夫(39)と中学1年の長男(13)と暮らす看護師。昨年5月に入会し、同世代の女性3人と手紙を交わしている。 携帯電話を手にした20代。友人らと毎日10〜20通のメールをやりとりした。看護師になって夜勤などで生活時間は不規則に。友人も家庭を持ち、やりとりは減り始めた。SNSに日々の出来事をつづってみたが反応は薄く続かなかった。 長男の小学校卒業を目前にしたころだ。「仕事と子育てに追われて、『空っぽ』になっている自分に気づいたんです」。その時、ネットで文通村を知った。 家族旅行のこと、お手軽料理の相談……。手製の消しゴム印を押した封書で手紙を送る。返事は月に2、3通。その数と間合いが心地よい。「遠いどこかに自分のことを考えてくれてい

相手を思い自分問い直す

る人がいる。手書きの文字から、そんなじんわりした感じをもらえます」 茶畑通りの「杉」を名乗る、静岡県磐田市の建設会社員の女性(32)のきっかけは、一昨年のアトピー性皮膚炎の悪化だった。かゆみで寝られず、仕事も集中できない。退社も考えた。 「昔はこんなに行き詰まりを感じたことがなかったのに」。将来に漠然と不安を感じていた中学時代。支えとなった同級生3人との手紙の交換を思い出した。 「文通」でネット検索し、サイトにたどり着いた。 アトピーで大変だったときの話、読んだ時代小説のこと。白紙に色鉛筆で野線を書き入れた便箋に、ペンを走らせては読み返し、何日もかけて書き上げる。 何でも話せる友人もいるが、直接話をする、不安感からついイライラしてしまう。携帯メールは返事をせかされている気分になる。「手紙は相手のことを



「文通村」事務局に届いた色とりどりの手紙を各会員あてに仕分ける保科直樹さん(右)とスタッフ

- 文通を長続きさせるコツ (湯沢まゆみ編集長のアドバイスから)
- 返事は1〜2週間のうちに出す
 - 四季の話題を利用する
 - 読んだ本、見た映画などささやかな日常を書くところから、相手の人となりを探る
 - 市販の封筒ではなく、土産物や菓子の包装紙を使って手作りの封筒を作ってみる
 - 会報や会員募集サレで主宰者・運営者の氏名や連絡先が明示されているかを確認する

「手紙を楽しむ」をコンセプトに、東京法規出版が06年に創刊した季刊誌「かじ」(Ca.ci.co.)の湯沢まゆみ編集長は「手紙は、相手のために時間を封じ込められるツール。ネットでいつでもどこでも瞬時に言葉を書けるようになったからこそ、両方を知る世代が立ち止まり、自分にとっての『意味あるもの』を問い直している」とみる。 同誌の年間購読者約5千人の3割あまりは30代以下。読者が団塊世代から若者に広がったという。3月号は若者の街、東京・表参道に増えるおしゃれなポストカード専門店や雑貨店を訪ねる「文房具散歩」が特集だ。(隅田佳孝)

病院選びの不安に応える

手術数でわかる 週刊朝日ムック

いい病院